

日本における英語集中プログラムの評価
Evaluation of an Intensive ESL program in Japan
 アレン玉井光江・高橋基治
 (文京女子大学)

海外留学や短期語学研修を望む学生が増加するのに対し、現地での学習が効果的に行われるように、学生たちのアカデミックな英語力を向上させることを目的とし昨年度本学で初めて日本での短期集中 ESL プログラムが実施された。今回はそのプログラムの評価について発表する。

プログラム内容

アメリカの大学で長年留学生や研修生を教えている ESL 専門の先生を 2 人招聘し 2 週間の集中講義が行われた。また、特色として先生の他に学生アシスタントと呼ばれる在日留学生も加え、授業以外でも英語に接する機会を豊富に提供した。小人数で native speaker の先生及び、学生アシスタントとの共同生活により、日常の英語会話が習得できるように、また、このプログラムに参加することで英語力がつくだけでなく、これからの英語学習の仕方や、学習のポイントが習得できるように考慮された。プログラムの目的は、受講生の 4 技能全体を向上させ、特に英語における Communication 能力の育成にあった。レッスンプランは招聘された先生が作成した。その概要は次のようなものである。

Each day we will focus on a specific topic such as friendship, family life, work life, recreation, money, and ethnicity. The daily topic will be explored using a variety of language skills (listening, speaking, reading, and writing) and a variety of materials (songs, video, newspaper articles, and advice letters). Students' skills will be strengthened and their self-confidence in using English fostered through active participation and positive interaction with classmates and instructors.

被験者

上記のプログラムに参加した東京都内の女子短期大学（英語英文学科）に在籍する 17 名と埼玉県にある女子大学（経営学部）に在籍の 4 名の女子学生、および 2 名の担当教師（アメリカ人）

評価手順

研修プログラム、およびアメリカの先生から送られてきたレッスンプランを検討し、このプログラムの目標を推測し、それにあわせ、プログラムの効果を測る 3 つの測定方法を検討した。測定するのは(a)総合的な英語能力の変化、(b)英語学習に対する意識の変化、(c)オーラル能力の変化とした。これら 3 つの能力の測定を中心に次の順番で評価を実施した。

- (1) 上記の 3 つの測定を可能にする Instruments を開発し、作成した。
- (2) Pretest をプログラムが始まる前に実施した。
- (3) プログラムがどのように運営されているのかを見学、観察した。その際担当の 2 名の教師、また 2 名の Student Assistant に Interview した。

11月4日(土) 研究発表4 第7室(209)

(4) Posttest を実施した。

Instruments

Measurement for general proficiency (総合的な英語能力の測定)

本研究においては英語を第二言語として学習している高校生の能力を測定する目的で作られた SLEPT (Secondary Level of English Proficiency Test) の第3版を使用した。このテストは Listening と Reading セクションに分かれ、それぞれ75問ずつ用意されている。全て4つの選択肢から正解を選ぶ形式になっており、Listening の項目は全てテープを聞いて答えるようになっている。所要時間90分のテストである。テスト時間の制約の中、このテストに含まれる項目を Pretest と Posttest に分割して使用した。それぞれのセクション項目のうち数個を係留項目(anchor item)として使用し、Rasch Model に従い、Pretest と Posttest の等化を試みた。

Measurement for affective factors (英語学習に対する意識)

受講生の英語学習動機、および英語学習に関する意識を23のアンケート項目を作り、調査した。受講生はプログラムの前後に同一のアンケートに答えた。

Measurement for oral skills (オーラル能力の測定)

受講生に課題を与え、その言語的反応を一人ずつビデオおよびテープに録音し後に全体的、また個別的に分析した。Pretest としての課題は「アメリカのホテルで友人がいなくなっていました。ホテルの従業員に友人を探してもらうために彼女について説明してください。」であった。Posttest は受講生は同じように東京駅ではぐれてしまった弟か妹を探すために警察官に彼〔彼女〕の描写をするものであった。

受講生によるプログラム評価

研修時期、研修場所、授業内容に関するアンケートも実施した。

結果

まず、SLEPT テストから作成され、項目が等化された Pretest と Posttest を T-検定で比較すると Reading セクションではその差は見つからなかった($df=20$, $t=-1.88$, $p=.075$)。しかし、Listening セクションでは統計的有意差が見つかった($df=20$, $t=3.70$, $p=.001$)。

英語学習に関する意識調査では、2項目を除く全ての項目において平均点があがっていた。それは受講生が英語学習に関して肯定的な考えをもつように変化していったことを示す。

受講者全員の oral interview の録画を見ながら2名の測定者が pronunciation, fluency, accuracy, non-verbal の4つの側面から5点満点で採点し、それらの総合点をプログラムの前後で比較したところ統計的有意差が見つかった($df=19$, $t=4.26$, $p=.001$)。

これら3つの測定方法から、また同じに行われたプログラムに対する学生の全体的な評価から今回のプログラムは成功したと思われる。被験者の数が少ないため項目分析の処理は信頼性の低いものになっているがこれからのテスト開発に役立てたい。